

[論文]

忘却と祈り

——君の名は大森荘蔵？——

佐藤英明

- 〈目次〉 はじめに
- 1 夢
 - 1-1 立ち現われ一元論
 - 1-2 幻滅論法
 - 1-3 夢と想起
 - 2 時間
 - 2-1 入れ替わり
 - 2-2 記憶と記録
 - 2-3 8年半前のメール・8分半前の太陽
 - 3 歴史
 - 3-1 物語り
 - 3-2 糸守の歴史
 - 3-3 探究
 - 4 祈り
 - 4-1 「後の祭り」を祈る
 - 4-2 未来
 - 4-3 宿命
- おわりに

はじめに

2016年に公開された新海誠監督の『君の名は。』は、東京に暮らす男子高校生・瀧と山深い田舎町に暮らす女子高校生・三葉に起こった「入れ替わり」現象から災害時に人命を救うストーリーへと展開していく劇場アニメ映画である。人格の入れ替わりは、小説や映画、ドラマ、アニメなど多様な作品で用いられている物語類型の一つである。身体から切り離された心が別人の身体と結びつくこととしてイメージされ、身体の交換（body swap）もしくは心の交換（mind swap）と解釈できるため、心身二元論的な構図と親和的である。しかし、『君の名は。』で描かれる「入れ替わり」は、一元論的に捉えることで、その意味がより明確になるものと思われる。本稿では、大森荘蔵の「立ち現われ一元論」にもとづいて、この映画の内容を考察していく。

1 夢

1-1 立ち現われ一元論

同一の事物でも人によって違って見える。また同一人物が同一の事物を見る場合でも、視点の変化や眼鏡の有無などによってその見え方はさまざまに変化する。同じ事物が多様な見え方をすると、客観的対象として事物が存在し、それが「知覚された姿」、「見られた姿」が主観によって異なるのだと考えるのがふつうである。事物は客観的には同一不変であっても、主観的には変化し変貌する。「知覚された姿」は、事物そのものではなく、事物の像、「表象」にすぎない。こう考えるのはごく自然であり、常識的でもある。

客観的事物そのものが外界に存在するとすれば、その「知覚像（心像）」はそれぞれの主観の内界にあるはずである。一つの外界に対し、各人の心の世界としての内界がある。そして、外界は各人の内界に「写し」としてとり

こまれる。このような考え方は物心二元論とむすびつく。

大森莊蔵は、こうした「外なる世界と内なる心、という分別は誤りだ」⁽¹⁾とした。二元論では、知覚像は「表象」とされる。表象する知覚像は表象される対象とは区別される。これに対し、大森は「立ち現われ一元論」を提唱した。「表象」が、その背後に実物を想定するのに対し、「立ち現われ」は実物の写しではなく、実物そのものの現われである。それゆえ、「立ち現われ」は背後をもたない。こうした考え方は、「存在とは知覚されること」としたパークリーの説を踏襲したものであるが、パークリーとは異なり、立ち現われには知覚的なものだけでなく、想起、想像、思考といった「思的立ち現われ」も含まれる。「現在の視覚風景には、『直接見えている』ものの向こう側（つまり背後や内部）、そしてまた以前と以後が（思い、という様式で）立ち現われ、現前している⁽²⁾のである」。

現われの背後に同一不変の実在があり、それがさまざまなものを現わすという二元論的構図は否定される。立ち現われには背後はない。背後にある対象が立ち現われるのではなく、「対象がじかに立ち現われる」というのが、一元論的構図である⁽³⁾。同一の対象が幾度も立ち現われ、その度毎に、立ち現われ方（知覚的、想起的、想像的等）も立ち現われる姿も異なる。「すべての立ち現われはひとしく『存在』する。夢も幻も思い違いも空想も、その立ち現われは現実と同等の資格で『存在』する⁽⁴⁾」。その意味では「『立ち現われ』には真偽がない⁽⁵⁾」ということになる。

1-2 幻滅論法

しかし、われわれは見誤ることがある。たとえば、山道で蛇に出会い足がすくむが、よく見るとただの朽ち縄であったといった場合、蛇が見えたのは錯覚である。こうした状況について「錯覚論法（argument from illusion）」では、正しい知覚と錯覚を比較して次のように論じる。①山道で蛇が見えたと思ったとき、②よく見直しても蛇だったという場合（正しい知覚）と、③実は朽ち縄だったという場合（錯覚）がある。②の場合でも③の場合でも、①

の体験は共通である。③の場合、①で見えていたのは実物（朽ち縄）ではなく、表象（蛇の心像）にすぎない。だとすれば、②の場合も、①で見えていたのは実物の蛇ではなく、蛇の表象でなければならない。こうして「錯覚論法」からは、実物と表象の二元論が導かれる。

大森は、これを逆手にとりいわば「逆-錯覚論法」を展開している⁽⁶⁾。②の場合でも③の場合でも、①の体験は共通であるというところまでは同じだが、錯覚論法では③で見えていたのが表象（心像）であれば、②で見えていたのも表象であるとするのに対し、大森は、②で見えていたのは実物（蛇）なのだから、③で見えていたのも実物（朽ち縄）であると結論づける。錯覚論法が、「真実でない場合（錯覚）」に心の中の何かが思い浮かべられているとすれば、「真実である場合（知覚）」も同様であるとするのに対し、「真実である場合にそれは心の外のことであることは明らかである」から、「それが真実でない場合にも心の外のことであることは明らかである」とするのである。

「真の世界」「真の実在」としての外界に対し、必ずしもそれとは一致しない「写しの世界」「表象の世界」としての内界を対置するのが二元論的構図である。デカルトの心身二元論の背景もそこにある。①蛇が見えたと思ったとき、②実際に蛇だった場合と、③実は朽ち縄だった場合（錯覚）があるが、デカルトは②と思われたものも③ではないかと疑うことができる。②か③かを区別する判定基準がないということである。しかし、②の場合でも③の場合でも、①の体験は共通であり、表象の存在を疑うことはできない。それに対し、外界の存在は疑うことができる。その意味では、デカルトの「コギト・エルゴ・スム」は「写しの世界」の不可疑性の確認である。そこでは「錯覚論法」が懐疑の形をとっている⁽⁷⁾。二つの世界を想定するが、写しの世界が真の世界の「正しい姿」であるかどうかを疑うことができ、真の世界にどう対応しているかを知ることはいできない。

しかし、真の世界の手掛かりが何もないとすれば、そのような世界を想定することに意味はあるのだろうか。そう考えれば、デカルトの懐疑は、二つ

の世界を想定する二元論哲学そのものへの懐疑ともなる。二つの世界が実は同じ一つの世界であるとすれば、二つの世界の対応についての懐疑は生じない。その懐疑は二つの世界を前提しなければ成立しないからである。真の世界との対応を前提とした②正しい知覚と③幻（錯覚）の区別も無意味となる。それゆえ幻は消滅することになる。大森はこれを「幻覚（錯覚）論法（argument from illusion）」に対置して「幻滅論法（argument to disillusion）」⁽⁸⁾と呼んでいる。

一元論的構図では、真理を表象と実物との一致とみなすような「対応説（correspondence theory）」をとることはできない。相互の整合性によって、もろもろの立ち現われはさまざまな同一体制のもとに組織化される。「その組織に参入した立ち現われが『実在する』立ち現われであり、その組織にあぶれて孤立する立ち現われが『実在しない』虚妄の立ち現われと、呼ばれるのである」。それゆえ、この構図では真理に関して「整合説（coherence theory）」⁽⁹⁾をとることになる。

立ち現われはさまざまな仕方で分類される。一つは、知覚的、想起的、予期的、空想的といった立ち現われの「様式」による分けである。また、立ち現われるものが空間的事物か方程式や正義といった非空間的なものかによって、カテゴリー的に分類される。これは立ち現われる物事の「材質」による分類である。こうした分類とは独立に、「真・偽」「嘘・まこと」「現実・非現実」といった「様相（modality）」による分類がなされる。非現実とは現実と同様に立ち現われる。知覚的には幻や見間違いとして、想起的には記憶違いとして、非現実とは立ち現われる。現実と非現実の違いは、立ち現われの「様式」の違いでも「材質」の違いでもない。現実と非現実の区分は無数の立ち現われの間の組織上の区分である。「現実」と呼ばれる立ち現われは寄り集まって一つの組織、一つの網の目をつくる。この網の目にもぐりこむことのできなかつた立ち現われが「非現実」と呼ばれる。⁽¹⁰⁾

この組織は「固定したものではなく、絶えず再編制され絶えず揺動するものである」。それは「真理」や「実在」の観点から組織されたものではなく、

「生きるために賭けられた実践的組織」であり、この生きるための組織が「真理」や「実在」と呼ばれる。「真理や実在によって生きるのではなく、生き方の中で真理や実在が選別的に定義されるのである」。それゆえその定義は「気まぐれや知的興味からなされる定義」ではなく、「命を賭け、生活がかかった定義」である。そのため「生き方が変ればまた真理や実在も変り⁽¹¹⁾る」。

1-3 夢と想起

立ち現われ一元論では、過去の出来事の想起を過去の知覚経験の再現と考えるのは誤りとされる。過去の痛みを想起しても、その痛みを感じるわけではないし、昨夜の美食を想起しても、それを再度味わえるわけではない。過去のオリジナルの知覚経験が記憶として保存され、それが後になって再生されるのが想起である⁽¹²⁾というのは誤解である。最初に知覚経験があり、後にそれを想起するという「二段構え」ではなく、「過去」は想起によって初めて体験されるという「一段構え」である。

夢についても、最初に夢見の経験があり、次にそれを想起するという「二段構え」ではなく、ただ目覚めて夢を想起するという「一段構え」になる。われわれはふつう睡眠中に夢をみるという経験をして、目覚めてからそれを想い出すと考えている。しかし、大森はこうした常識を否定する。「夢をみた」という経験は、夢を想い出すという想起体験である。そして夢の想起は、一度みた夢を再生したり再現したりすることではない。「夢は眠ってみるのではなく目覚めて想起するものなのである」⁽¹³⁾。

このことから夢の想起の不可謬性が帰結する⁽¹⁴⁾。夢の想起について誤謬を考えることはできない。たとえば昨夜の夢を「高いビルから鳥のように飛び降りた」と想起したとき、それは間違いであって本当にみたのは「自転車で転んで崖から落ちた」夢だったと言っても意味はない。夢は想起されたとおりのものでしかない。その想起が、原型の夢の再生ではないとすれば、正誤を判定すべき原型は存在せず、原型と異なるという意味での誤謬はありえな

い。それゆえ、夢の想起は無謬である。

夢の想起の不可謬性は、覚醒時の経験の想起にもあてはまる。⁽¹⁵⁾ 想起が、原型の知覚経験の再生でないとするれば、夢の場合と同様に原型と異なるという意味での誤謬はありえない。想起から独立な過去経験という想定を拒否すれば、想起の正誤を判定する基準は存在しなくなる。自分自身の知覚経験や行動の想起もまた無謬である。

しかし、想起した経験が実はそうではなく、記憶違いであったことに気づくといったことはよくある。最初の想起が、その後の想起によって訂正されるような場合である。その場合には、たしかに想起相互の食い違いが問題となる。昨夜は缶ビールを2本飲んだと想起したが、実は3本飲んだことに自分で気づくといった場合、正誤の判定がなされることになる。だが、このとき昨夜の飲酒という原型との合致が確認されるのではない。想起が食い違ったときには、想起以外の物的証拠（空き缶の数）などにより、いずれの想起が正しいか判断される。想起と原型との不一致は存在しないという意味においては想起は無謬であるが、想起相互の食い違いはある。「この場合は想起以外の種々な証拠——メモ等の物的痕跡、他人の証言、等——によって正誤の判定が総合的になされる」⁽¹⁶⁾。

したがって、想起と独立の過去経験を否認しても、記憶の正しさについて語ることは可能であり、過去経験と合致しない想起を否認しても、受容できない想起について語ることは可能である。想起された過去のうち、受け入れることのできない過去は廃棄され、いわば「自然選択」が働いて「真なる過去」が形成されていく。それは、多様な想起経験の中から真なる想起を選び出すということであるが、それは「当の人物を知らないでその人の何枚かの写真から一番似ている写真を選び出すようなものである」⁽¹⁷⁾。

真なる過去は、現在の状況と自然な接続が可能なものではなければならない。「昨日彼女と映画館に行った」という想起は、その映画館が先月閉館したとか、想起した当人または彼女が骨折で入院していたが今日退院したといった現在とは接続が困難である。現在接続が困難な過去は廃棄される。それ

ゆえ、現在接続は、過去の評価の中核となる。科学理論が実験や観測事実に適合することを求められるように、過去命題は現在に自然に接続することを求められる。さらに、「自然法則や人間の自然な心情や行動に適合しない不自然な過去」もまた拒否される。科学理論の評価に関しても「既成の理論との親和性や考慮すべき実験の選択、更に理論提出者の学問的信憑性やときにはその党派性や個人的感情までそこに参入する⁽¹⁸⁾」。この点で、過去命題の評価と科学理論の評価は類似している。

想起命題のうち「あるものは真として受容され、あるものは嘘とか記憶違いとして拒否される⁽¹⁹⁾」。夢とは、受容できない過去の想起として廃棄されるものの一つである。夢はなぜ真なる過去から排除されるのか。それは、自分の経験について「過去の連結性」が求められるからである。自分の過去は一本の糸のようにつながり、途中で切れ目や間隙があってはならない。そして、自分は一人しかいないから、そこに分れ道やわき道があってもならない。自分の真なる過去は、一本の糸のような一貫性をもっていなければならない。これが自分の過去に要請される「過去の連結性⁽²⁰⁾」である。

ところが夢の中の出来事は、それ以前の自分の過去と接続していないし、目覚めて夢を想起している現在との接続も困難である。夢の中の過去は、過去の連結性からはみ出している。多様な想起経験のうちから受容できない想起として廃棄されるという点では、夢は記憶違いや妄想と同じである。いずれも一本の糸のごとき過去の経験の一貫性に組み込むことができない。だが、夢については、それを押し込むのにちょうどよい過去の空白部分がある。それは、夢から目覚める前の睡眠中の時間である。そこは自分の記憶が欠落している空所である。この空白に、廃棄すべき過去として夢の中の過去を配置すれば、過去の他の部分は影響を受けず、過去の連結性が保たれることになる。子どもが夢と現実を区別できないのは、目覚めたときの想起を廃棄すべき過去として睡眠中の空白期間に配置できないからだ⁽²⁰⁾と考えることもできるだろう。

2 時間

2-1 入れ替わり

『君の名は。』の前半では、異性との入れ替わりによって周囲の人間を巻き込んででもたらされる出来事がコメディとして描かれる。入れ替わりは最初は現実とは認識されない。瀧は自分が田舎の女子高校生になった夢をみたと思いい、三葉は東京に住む男子高校生になった夢をみたと思う。眠ることがきっかけで別人となり目覚めると自分に戻る。目覚めた自分の「過去の連結性」からはみ出す出来事は、夢とみなされ真なる過去として受容されない。

しかし、それが何回か繰り返される中で、入れ替わりが現実の事象と認識されるようになる。二人の入れ替わりは9月2日から10月2日までに（劇中で描かれていない日も含めて）11回おこつたとされている⁽²¹⁾。9月2日の朝、瀧は目覚めると女性の体になっている⁽²²⁾（小説13）。この日の三葉の最初の入れ替わりは劇中では描かれず、三葉はその夢のことはほとんど忘れている。

「うーん……なんか、ずっと変な夢を見とつたような気がするんやけど……あれは、別のヒトの人生の、夢？ ……うーん、よく覚えとらんなあ……」（小説28）

9月3日の三葉の言葉である。三葉は、前日の記憶がなく自分の行動を思い出せない。切れ切れに覚えているのは、どこか知らない街にいたということだけである。3日に友人の早耶香からは、自分の机もロッカーも忘れ、髪はぼさぼさの寝癖で、制服のリボンもせず、ずっと不機嫌だったと聞かされる。ノートの白紙だったページには他人の筆跡で「お前は誰だ？」と大きな文字が書かれている（小説26）。それらは三葉と入れ替わった瀧の行動である。

9月5日の朝、三葉は目覚めると知らない部屋で男性の体になっている

(小説46). 迷いながら昼に学校に着き、放課後は瀧の友人の高木と司とカフェに。その後、バイト先では奥寺先輩のスカートを刺繍糸で繕っている。帰宅後、「ホントに良く出来た夢やなー」と思いつつ、瀧のスマホの日記にその日の体験を入力する。そして、手のひらにマジックで「みつは」と記す(小説67-70)。

9月6日、瀧は自分の手のひらの文字やスマホの日記を見る。高木は司に「あいつ今日はフツウじゃん?」と言っている。バイト先では記憶にない昨日の自分の行動に対して先輩たちから追及を受ける。5日の記憶は瀧には欠落している(小説71-73)。

9月13日、三葉が目覚めると手にマジックで「みつは??? お前はなんだ? お前は誰だ???」と書かれている。前日の美術の時間には自分が花瓶の載った机を蹴り倒したと早耶香から聞かされる。帰宅して古典のノートを開くと、自分の名や個人情報、そして「この人生はなんなんだ???」の文字が目に入る。この日、瀧はスマホの日記で、自分の書いた日記に挟み込まれるように記憶にない内容が書かれているのを確認する。この時点で、二人は入れ替わりが本当の体験だと意識するようになり、スマホに日記やメモを残し合ってコミュニケーションをとるようになる(小説74-84)。

入れ替わっていた時の記憶は、目覚めるとすぐに不鮮明になるが、「俺たちは確かに入れ替わっている」と判断する。それは「なによりも周囲の反応がそれを証明している」からである(小説79)。自分の行動の記憶が欠落している日がある。しかし、その行動については他者の証言があり、メモなどの物的証拠がある。これがふつうの夢とは異なる点である。他人になっていたという記憶はあるが不鮮明である。このとき想起の整合性が、想起以外の証拠によって判断されるとすれば、現在との接続という観点から「入れ替わり」と判断するのが妥当である。しかし、そうすると「過去の連結性」は保てなくなる。自分の過去の途中に間隙があり、分れ道があることになるからである。大森も「眠って夢をみる、という仮構の夢物語」におさまらない場合、ジキルとハイドのように「自我を複数化することで複数の連結過去を認

める多重人格という別枠」が必要になることもあると述べている。⁽²³⁾

宮水神社の御神体に口嚙み酒を奉納しに行く途中、祖母の一葉は「産霊(むすび)」という生成の力について語る。

「よりあつまって形を作り、捻れて絡まって、時には戻って、途切れ、またつながり。それが組紐。それが時間。それが、ムスビ」(小説88)

神の力である「産霊」を組紐のかたちや人の繋がりと同ね合わせ、一種の時間論として語った言葉である。

自分の過去に対して要請される「過去の連結性」は、一人の人間の過去のもつ一本の糸のような一貫性であり、間隙や分岐があってはならない。よりあつまったり、捻れたり、途切れたりするような過去(時間)は、連結性の要請に反している。しかし、想起以外のさまざまな証拠が、正誤の判定において過去の連結性をしりぞけるべきことを示すとすれば、二人の人間の過去が交差する「入れ替わり」も容認されることになる。

2-2 記憶と記録

記憶が失われた過去は想起できない。しかし、記録を残すことで、記憶が失われても想起が可能となる。そして、記録によって過去を他者に伝えることも可能となる。スマホの日記は、受け入れることのできる過去を選び出すための根拠となる記録である。

10月2日を最後に入れ替わりが途絶える。瀧は記憶をたぐり、三葉の住む町のスケッチを描き続ける。スケッチもまた記録の一つである。2016年10月⁽²⁴⁾21日、瀧は三葉を探すため、そのスケッチだけをたよりに司と奥寺先輩と飛驒に行く。情報が得られないなか、ようやくその風景を知る人物と出会う。しかし、その場所は3年前に隕石落下による災害で何百人もが命を落とした糸守町であった(小説108-121)。

瀧は図書館で関連資料を探す。図書館の資料は、糸守町の広範囲が甚大な

被害に見舞われ、犠牲者が五百人以上であったことを示している。被害を免れた千人ほどの住民も転出者が相次ぎ、十四ヶ月後に糸守町は自治体としても消滅した。こうした記録が確認される一方で、三葉が残したスマホの日記は消えていく。真なる過去を形成する根拠となる記録が入れ替わっていくのである（小説122-124）。

しかし、これは三葉と入れ替わっていたという記憶と「つじつまが合わない」（小説125）。「三葉の住まいは、糸守町ではない」と考えるべきではないのか。瀧は「そう考えたかった」が、犠牲者名簿の中に三葉の名を見つける（小説126-128）。想起は物的証拠によって否定される。入れ替わりは「妄想」だったのではないかと思いは始める。そして、三葉の名前も瀧の記憶から消えていく（小説131）。

現在との接続という観点から「入れ替わり」と判断された際にその根拠となっていたのは、自分の行動の記憶が欠落している日に相手の日記（メモ）などの物的証拠が残されていたことであった。そして、その日記などを通じて相手とコミュニケーションをとることができた。こうした判断は、入れ替わりの相手と自分が同じ「いま」を生きていることを前提としたものである。ところが、同じ「いま」と思われていたのは、たんに日付が同じであったため、実際には三年の時間のずれがあったということになる。しかし、三年の時間のずれがある相手と「昨日」の出来事について伝え合っていたと考えるのは無理がある。

想起相互の食い違いが生じたときには、想起以外の種々の証拠によって総合的に正誤の判定がなされる。それまで証拠とされていたメモが消え、新たな証拠が示されれば、正誤の判定も揺れ動く。真なる過去を形成するために選択される記憶や記録が変化すれば、そこから構成される過去も変わる。10月2日までの入れ替わりの過去は、いったんは妄想としてしりぞけられる。しかし、奥寺先輩から手首に巻いた組紐のことを問われた瀧は、「必死に記憶を探る」（小説134）。組紐について語る一葉の言葉、御神体への口噛み酒の奉納の記憶がよみがえる。その記憶をたよりに瀧はその地へ向かい、御神

体の巨木の姿を発見する。そして、その記憶が「夢じゃ、なかった」ことを確認する（小説141）。

「三年前のあいつと、俺は入れ替わってた」（小説143）というのを現実と考えるのは難しい。しかし、最後の入れ替わりのとき、瀧は御神体のある場所が「隠り世（あの世）」であることを一葉から聞いている（小説90）。これ以降の瀧の体験は、この世（現実）ならざる場所を介してのものとなる。それゆえ、それはまことの過去（現実）には組み入れることのできない不自然な過去、現在接続が困難な過去となる。虚構の物語である『君の名は。』の核心部はここにある。

2-3 8年半前のメール・8分半前の太陽

われわれはふつう、「いま」起こっている出来事を目にし、「いま」目の前で演奏されている音楽を聴いていると思い、「いま」目の前にいる相手と、あるいは「いま」電話で話している相手とコミュニケーションしていると考えている。しかし、それは必ずしも自明なことではない。二つの「いま」のあいだにずれが生じることもある。

新海誠の『ほしのこえ』（2002年）は、相手との時間のずれが大きくなっていくなかでのコミュニケーションを扱った短編映画である。国連宇宙軍の調査隊員に選抜され宇宙に旅立ったミカコと地球に残ったノボルとの超長距離メールによる交信の様子が描かれている。ミカコが地球を離れた2047年、二人は中学3年生であった。宇宙船が地球から遠ざかるにつれ、メールの往復に要する時間は、数日、数週間とどんどん長くなっていく。そして2056年に24歳のノボルが受け取ったのは、8年半前に15歳のミカコが8光年以上離れた地から送信したメールであった。

大森は、今現在「過去が見えている」という事例をとりあげている⁽²⁵⁾。太陽の光が地球上に達するには約8分半の時間がかかる。したがって、今現在われわれが知覚している太陽は8分半前の過去の太陽ということになる。今現在の太陽は、知覚されている太陽から約2度西方にずれたところにある。そ

れは今われわれに見えていない。しかし「過去が今現在見えている」というのは「論理的矛盾」ではないのか。

実物と表象の二元論を前提とすれば、この事態は次のように説明できる。「実物」の太陽は、今現在約2度西方の位置に存在している。しかし、それはわれわれには見えていない。今現在知覚されているのは、今現在は存在しない8分半前の過去の太陽の「表象」にすぎない。それゆえ、今現在、過去そのものが知覚されているのではなく、過去の実物の「写し」が知覚されているにすぎない。知覚されているのが今現在は存在しない過去の「写し」でしかないとすれば、もはや存在しないはずの過去が今現在存在するという矛盾は解消される。

こうした二元論的解釈は、すべての視覚に適用される。対象からの光が網膜に到達するには、どんなに近くにある物でも多少とも時間を要するし、網膜の光刺激が視神経を通して大脳に伝わるにも時間を要する。それゆえ、視覚像はすべて「過去の実物」の写しでしかなく、われわれは決して今現在存在するものを見ることができないということになる。⁽²⁶⁾

これに対し、大森の「立ち現われ一元論」では、「過去の事件を今現在想起している」ということに何の矛盾もないように、「過去の事件が今現在見えている」ということにも論理的矛盾は見いだせない⁽²⁷⁾とされる。知覚は、想起、予期、想像といった体験と同様に今現在の体験であるが、それらとは体験様式において異なっている。知覚、想起、予期といった体験様式の違いは、現在、過去、未来という意識と関係している。知覚体験の内容が現在と認識されるのに対し、「想起体験の核心は、その体験される内容が過去であるという意識にある」。同様に未来の意味も予期や意図の体験のうちで与えられる⁽²⁸⁾。しかし、これらの「体験様式で体験されている事件の『時刻』が、現在か過去か未来かということは、この体験様式だけによっては決定されてはいない⁽²⁹⁾」。知覚、想起、予期において、それぞれ現在、過去、未来という意識をともなって体験された事件も、その「時刻」が現在、過去、未来のいずれであるかは決定されていない。そして「時刻」は、「経験全体の整合的

な時刻配列」によって、そして「各時期文化における科学的知識」によって決定されることになる。それゆえ、「時刻」において過去の事件が今現在、視覚という様式で体験されるということには何の矛盾もない。そして、それは過去が想起される体験と体験様式において異なっている。過去の事件の「写し」が見えているのではなく、「時刻」において過去の事件が今現在じかに見えているということである。

一本の線を引き、その中ほどに点を打ち、そこを「現在」として、一方を「過去」、他方を「未来」とすることで「時間」を表す。これは、物理学の発展の中で形成されてきた「線形時間」である。「時刻」とは、線形時間上の一点である。われわれはこうした時間の把握に慣れ親しんでいる。しかし、大森によれば、「線形時間」は直接体験的に与えられている時間から変造されたものにすぎない。後者の時間は「原生時間」と呼ばれる⁽³⁰⁾。

直接的体験は「途切れずに続いている」。この「原生的連続」を変造し高度に概念化したものが線形時間における一次元実数の連続性である。原生時間には、体験における以前、同時、以後という時間順序がある。時計の針の位置との同時性を利用すれば、この原生的時間順序に時刻づけすることができるようになる。しかし、それは線形時間における点時刻とはまったく異質である⁽³¹⁾。

「その時々」に自分に見えている知覚風景を考えることができる。この「その時々」から「今という瞬間」という概念が導かれる。この「瞬間」という概念には「短い持続」という意味しかない。しかし、それをさらに分割し短縮化を繰り返せば、「極限的に持続ゼロ」の「点時刻」にたどりつく。これが線形時間における「点時刻」である⁽³²⁾。線形時間における連続性や時間順序は、この「点時刻」の概念を基礎として、原生的時間における連続性や時間順序を変造したものである。現在、過去、未来の意味は、知覚、想起、予期という体験様式の違いによって与えられる。これらの意味は、原生時間に対してしか問うことができない。線形時間においては、過去や未来は数直線上の一点を現在としてそれより右（または左）という形式的な規定に変造

されてしまうからである。⁽³³⁾ それゆえ、直接体験的に与えられる現在、過去、未来は、線形時間上の「点時刻」とは必ずしも一致しない（一葉が「産霊」として語った時間論もまた線形時間とは異質なものであった）。

このようにわれわれは原生時間の上に物理的な線形時間を重ね描きしており、その重ね描きの中での生活に慣れきっている。線形時間は客観的時間とみなされる、そのため、現在という点時刻との前後関係によってしか、過去と未来を把握できなくなってしまう。大森は、今現在、視覚という様式で体験される事件が、科学的知識によって線形時間上の過去の時刻に配置されることは、視覚体験のうちで与えられる原生時間の「今現在」の意味と矛盾しないと述べているのである。

3 歴史

3-1 物語り

大森は、過去の事件が今現在じかに見えているということに矛盾はないとする。これに対し野家啓一は、視覚と聴覚を比較し次のように論じている。音が空气中を伝播するには時間を要するから「数秒前に発せられた音をいま聞いている」という表現に違和感をおぼえることはない。しかし、それを「過去の音をいま聞いている」とは表現しない。聞いているのは、いま鼓膜を振動させている現在の音であり、数秒前に音源から発せられた過去の音ではない。⁽³⁴⁾

聴覚情報だけの世界を考えてみる。数百メートル先の音源から2秒前に音Aが発せられ、その1秒後に数十メートル先の音源から音Bが発せられる。物理学的な線形時間上では音Aが前で音Bが1秒後である。しかし、聴覚以外の知覚をもたない人は、音Bが先に聞こえ、音Aが後から聞こえる。この知覚的前後関係は動かすことができない。聴覚情報だけしか与えられない場合、Bが前でAが後というのを歴史的順序と信じるしかない。これに

加えて視覚情報が与えられたとき、知覚的順序と歴史的順序の齟齬が顕わになる。稲妻が見え、その数秒後に雷鳴が聞こえた場合、「過去の雷鳴が聞こえた」とは言わない。視覚的出来事が数秒前に起こり、聴覚的出来事がいま起こっている。この場合、稲妻と雷鳴は一つの知覚的出来事ではなく、二つの出来事として区別される。それゆえ、「数秒前の稲妻とともに発せられた雷鳴がいま聞こえた」という文は、視覚的出来事と聴覚的出来事という二つの出来事に言及し、両者の関係を述べたものである。⁽³⁵⁾

アーサー・ダントーは、二つの別個の時間的に離れた出来事 E_1 および E_2 を指示し、指示されたうちのより初期の出来事を記述するような文を「物語り文 (narrative sentence)」と呼んだ。⁽³⁶⁾ ダントーは「三十年戦争は1618年に始まった」という例をあげている。この文は、戦争の開始 (E_1) と戦争の終わり (E_2) を指示しているが、記述されているのは戦争の開始だけである。「1618年に——もしくは1648年より前に——この戦争を『三十年戦争』と記述できるものはおそらく誰もいない。「三十年戦争」という名称は、それが続いた期間によるものであるから、戦争が終結をむかえてはじめて使用できるようになる。同様に「『坊つちやん』の作者は1867年に生まれた」とか「夏目漱石は1867年に生まれた」という文も「物語り文」である。「坊つちやん」が発表されたのは1906年であり、「漱石」の筆名を初めて用いたのは1889年だからである。1867年に「夏目漱石は今年生まれた」と述べることができるものはいない。⁽³⁷⁾

物語り文は、初期の出来事 (E_1) を記述するものであるが、その時点よりも未来の出来事 (E_2) についての知識がなければ成立しない。出来事 (E_1) が起こった時点には、この記述は不可能である。過去の歴史を物語る文は、現在の知識を前提として語られる。現在の知識は、語られる出来事が起こった時点には欠落している。「ひとつの出来事についての真実全体は、あとになってから、時にはその出来事が起こってからずっとあとにしかわからないし、物語のなかのこの部分は、歴史のみが語りうるのである」。⁽³⁸⁾

想起可能な過去は、自分が体験した過去に限られる。しかし、そうした

「体験的過去」だけでなく、体験したことのない「歴史的過去」についても、われわれは語ることができる。⁽³⁹⁾「過去確定」は、「日常生活の至る所、夫婦や友人の間での大小の口論や職場での会合から、警察の取り調べや裁判での論争、政治家の嘘八百から歴史家の著作、更に宇宙開闢以来の過去を語る宇宙論や進化論といった科学上の学説に至るまで、あらゆる所で行われている⁽⁴⁰⁾」。そしてそれらは、物語り文によって記述される。

3-2 糸守の歴史

ティアマト彗星は千二百年周期で地球に最接近するとされる。千二百年前に彗星の一部が地表に衝突し、クレーターに水がたまってできたのが糸守湖である。さらに、その千二百年前に隕石衝突により生じたのが御神体のある円形の窪地とされ、御神体の「岩自体」が「ティアマト彗星由来の隕石」と想定されている。⁽⁴¹⁾こうした歴史的出来事について「糸守湖は平安時代の隕石落下によってできた」「宮水神社の御神体の岩は紀元前に落下した隕石である」と記述することができるが、これらは「物語り文」である。

瀧は御神体のもとで三葉の口嚙み酒を口にする。足を滑らせ転倒しかけたとき、浮遊感の中で幻影を目にする。タイムスリップの場面とされるが、このとき瀧に立ち現われているのは、糸守の過去の歴史であり、三葉の記憶を介した彼女の過去である。小説版では、次のように記述されている。隕石落下により山間の集落で多くの人が死に、集落ができ、湖ができるという出来事が、過去に二度繰り返された。この出来事を記憶にとどめ、文字よりも長く残る方法で後の世に伝えようとした。それが龍の絵や組紐や舞のしぐさであった。それらは、記録ではなく残された痕跡である。さらに、三葉の誕生と成長、四葉の誕生、母の死、父の嘆きといった記憶が語られ、入れ替わりの日々の出来事の記憶が続く（小説148-151）。糸守の歴史、三葉の個人史の物語りである。映画の観客には、このように瀧の視点から物語られた過去が提示される。

彗星災害という出来事（ E_1 ）が存在しなければ、それを物語ることはでき

ない。それは瀧の視点から、過去の歴史的出来事として述べられる。観客はその物語りを聞く。彗星災害は、物語りに先行しているが、その物語りを聞くことでしか、彗星災害は認識されない。そして、その物語には未来の出来事 (E_2) についての知識も含まれている。歴史的出来事が存在しなければ、それを記述することはできない。しかし、歴史記述を通じてしかわれわれは歴史的出来事を知ることができない。存在論的には、歴史的出来事が歴史記述に先行するが、認識論的には歴史記述が歴史的出来事に先行する。それゆえ、そこには循環がある。⁽⁴²⁾

3-3 探究

「歴史」という語は、明治以降「ヒストリー (history)」の訳語として使われてきたが、「ヒストリー」の語源はギリシア語の「ヒストリア (historia)」であり、この語は「探究」を意味している。⁽⁴³⁾ 歴史的出来事は、証拠や証言などにもとづく歴史記述によって知られる。探究の過程で、新たな証拠が発見されることもあれば、それまで証拠とされてきたものが破棄されることもある。それによって、「『あった』ことが『なかった』ことになったり、逆に『なかった』ことが『あった』ことになることも」起こりうる。歴史は、「このような『存在』と『認識』との間の絶えざるフィードバックを通じて確定されていくもの」である。⁽⁴⁴⁾

彗星災害という歴史的出来事を瀧が「探究」するなかで、一部の証拠や記憶は消滅し、あらたな証拠や証言があらわれる。彗星災害から8年後の2021年、大学生の瀧は就職活動をしている。5年前に司と奥寺先輩の三人で飛騨に行った記憶はあるが、二人と別行動をとって一人でどこかの山に登って夜を明かし、一人で東京に戻ったことぐらいしか覚えていない(小説239)。この世ならざる隠り世を介しての体験は、現実に組み込むことのできない過去として記憶から排除されている。他方で、人類史上まれにみる自然災害でありながら、偶然にも避難訓練で町民の大半が被害範囲の外にいて、住民のほとんどが無事であったという記録が、テレビや新聞、雑誌の報道として示さ

れる（小説239-240）。

4 祈り

4-1 「後の祭り」を祈る

大森は、マイケル・ダメットが「過去を変える（Bringing About the Past）」という論文で提起した「酋長の踊り」というパラドックス⁽⁴⁵⁾について論じている⁽⁴⁶⁾。ある部族で青年が成人するにはライオン狩りで力を証明しなければならないとする。狩場に行くには2日かかり、2日間ライオン狩りをして、その後2日かけてもどる。その6日間酋長は青年たちの成功を祈って踊り続ける。狩りが終わった時点で、事の成否はすでに決まっているから、それを変えることはできないはずなのに帰路にある間も祈り続けるのである。すでに決定済みの「過去自体」なるものが実在し、それを変えることはできないと考えるならば、酋長の祈りには何の意味もない。しかし、われわれも家族が乗り合わせた飛行機の事故を知ったとき、家族の無事を祈るだろうし、試験の合否が決定済みであることを承知しつつ合格の望みを抱く。

「決定済みの過去の実在」を前提とすれば、変えることのできない過去に対する「遡及的祈り（retrospective prayer）」はパラドクシカルである。しかし、大森は「決定済みの過去の実在」は錯覚にすぎないという。成否不明、安否不明、合否不明の間は、「まだ公認された過去物語りにはなっていない⁽⁴⁷⁾」。それは「まだ過去ではない」ということである。成否、安否、合否等についての情報が伝えられ、「公認公定の過去」として「公式の過去物語りに編入される」ことによって、それらは、はじめて過去に「あった」出来事になる。「遡及的祈り」は、過去を変えようとするものではなく、「まだ過去ではない」ことについての祈りであり、未来において望ましい過去が物語られることを祈っている⁽⁴⁸⁾のである。

犠牲者名簿に三葉の名を見ても、瀧にとって、三葉の死は「まだ過去では

ない。それはまだ「過去物語り」に「編入」されてはいない。それゆえ瀧は、「あの場所なら……」と思い、御神体へ向かうことになる。「まだ会ったことのない君を、これから俺は探しに行く」（小説136）という言葉には、未来において望ましい過去が「編入」されることへの思いがこめられている。隕石が落下した10月4日、糸守町は秋祭りだった。その祭りは瀧にとってまだ過去ではなく、三葉の無事への祈りは「後の祭り」⁽⁴⁹⁾ではない。

彗星災害から8年後の場面では、住民のほとんどが無事であったという記録が示される。瀧の「遡及的祈り」は望ましい過去の実現に結びついている。しかし、このとき瀧自身はその祈りのことも三葉の名もすでに忘却している。

4-2 未来

瀧と三葉は性別が異なり、住んでいる場所も都会と田舎で対照的であるが、さらに2013年10月4日の隕石災害という出来事が過去か未来かという点においても対照的である。隕石災害は、三葉にとっては未来の出来事である。

中島義道によれば、「未来」という言葉には少なくとも三つの異なるあり方が含まれている⁽⁵⁰⁾。「明日は日曜日で天気予報によると晴れるから、久しぶりに家族で高尾山にピクニックに行こう」と考えたとする。ここで「未来」に関係すると考えられるのは、①明日は日曜日だ、②天気予報では晴れた、③高尾山に行こう、の三つである。①は、取り決めに基づく言葉の用法であり、三葉が「来月は11月だ」「来年は18歳だ」というような場合である。ここには未来の出来事に関する具体的な情報はなにも含まれていない。たんなる時間軸上の位置の確認といってもいいだろう。②は未来に関する予測であるが、これは「単に過去のデータを——適当な変更を加えて——未来と称する無に向かって延ばしただけのもの」である。それゆえ、これも未来そのものについては何も語っていない。③は「意志」であるが、「高尾山へ行こう」というのは「現在の心の状態」であって、未来の意志ではない。それゆえ、

これらはいずれも未来自体についての考えではない。

アリストテレスによれば「未来に関する言明は現在は真でも偽でもない」⁽⁵¹⁾。野矢茂樹は、未来に関する言明が現在真でも偽でもないのは、未来が「生成するもの」だからだとする。「未来は存在の可能性としてあるのであり、存在の可能性は存在者ではない」。未来に関する言明は、「対象が生成することによって、真ないし偽になる」。それゆえ、「未来に関する言明の真偽はただ分らないだけではなく、現在において真偽を考えることが拒否されている」⁽⁵²⁾。

ダントーも、アリストテレスに依拠して「われわれは未来についてある程度筋の通った信念をもつことはできるが、知識をもつことはできない」とした。「アリストテレスの説は歴史的予知 (foreknowledge) を排除する」。しかし、それは「歴史的予断 (fore-belief)」まで排除するものではない。⁽⁵³⁾

「10月4日の夜、隕石が町に落ちるから住民を避難させよう」と三葉は考える。②隕石落下を予測し、①それが何時間後かを確認し、③災害回避の意志を示している。③はまさに現在の意志である。②の予測に関しては、「彗星の核が近地点で砕けることも、氷で覆われたその内部に巨大な岩塊がひそんでいたことも、事前には誰も予想できなかった」とされている (小説229)。落下の予測と避難計画は、瀧から伝えられことになっているが、これは隠り世でのこととされる。現実には、未来の災害は可能性としてあり、まだ生成していない。隕石災害の発生は、三葉の現在においては真でも偽でもない。

しかし、過去に二度繰り返された災害の痕跡は、組紐や舞のしぐさとして残されており、口噛み酒を口にした瀧がみた糸守の歴史や三葉の過去の幻影は、「三葉の記憶」(小説150)と考えられる。隕石落下の予測は、これらの過去の痕跡や記憶を未来に向かって延ばすことでもたらされる。災害を伝える瀧の声は、未来からの声ではなく、過去の他者からの声であったというべきだろう。そして、それは「未来についてある程度筋の通った信念」をもたらすことになる。

4-3 宿命

災害時に避難しよう（させよう）という意志決定をするとき、その判断の根拠となるのは過去の災害の記憶、記録、痕跡などである⁽⁵⁴⁾。それらを未来に向かって延ばすことで、未来についての予測（信念）がもたらされる。しかし、人々の災害の記憶は時間の経過とともに薄れていく。気象予報などの根拠となる過去のデータは、せいぜい百五十年程度しか記録されていない。地震や津波などの記録は、史料に残されていることもあるが、記録されていないものや消失したものもある。しかし、記憶も記録もない過去の災害の痕跡が残されていることもある。地質学者や考古学者によってその痕跡が読み取られれば、未来の災害の可能性に関する何らかの信念がもたらされる。

糸守町の地形は千二百年周期で最接近するティアマト彗星がもたらした自然災害の痕跡となっている。平安時代の災害を記録していたと思われる古文書は、繭五郎の大火によって焼失した。糸守町の人々に過去の災害の記憶はない。避難の呼びかけに結びつくのは、宮水神社に伝統として継承されてきたものである。組紐の文様や舞の振り付けに彗星襲来の様子が描写され、口噛み酒は彗星由来の巨石の内部に奉納される。こうした伝統文化とともに継承されてきたのが「入れ替わり」とされる。一葉は「ワシの母ちゃんにも、ワシにも、あんたらの母ちゃんにも、そんな時期があったんやで」（小説158）と瀧（三葉）に語る。宮水神社の人たちに伝統として継承されてきたこうしたシステムが有機的に結びついて、人々を避難させようという意志決定をもたらすことになる。一葉の言葉を聞いた瀧は「宮水の人たちのその夢は、ぜんぶ今日のためにあったのかもしれない！」（小説158）と思う。

彗星災害から8年後（2021年）の場面で週刊誌の記事がいくつか映されるが、そのなかに「民俗学者→神主→町長（異例のキャリア）」という見出しがある。三葉の父の宮水俊樹は、もともとは民俗学者であったという設定になっている。民俗学者として、宮水神社に調査に赴き、そこで三葉の母となる二葉と出会う。その後、二葉と結婚して婿養子となり、宮水神社の神職（神

主)になるが、二葉が病気で亡くなった後、家を出て糸守町の町長になっている。

民俗学は、伝承されてきた民俗資料や残存する文化・風習をさかのぼり、その原初形態を明らかにしようとする。俊樹は、糸守町の伝統である口噛み酒や組紐について民俗学的知識をもっており、繭五郎の大火によって焼失したとされる古文書の内容等について何らかの予測ができる人物と思われる。そのような人物が、宮水神社の神主となったことで、宮水神社の御神体のある場所が「隠り世」であるといった世界観についても詳しく知りうる立場になった。学問的知識に加え宗教的な体験を通じて理解を深めることができたと考えられる。そして、町長は、現実に町政運営をおこない町民を動かす立場である。劇中では明確に描かれていないが、最終的に町民の避難を決断したのは宮水町長であろう。

このとき、宮水俊樹は「今の自分」が「全町民に避難を命令することすらできる立場」であることを自覚する。そして、「そのような強い権限を持つ立場になりたいと、いつしか自らの意思で強く望んだ。そうして今、ここにいる」と過去を振り返る。そして、「今、自分が、この立場で、ここにいるということが、定められたひとつの導きだ」という宿命を語る⁽⁵⁵⁾。民俗学者として二葉と出会ってからの自分の人生を振り返り、それがすべてこの町民避難に結びつくものであったことを宿命として理解するのである⁽⁵⁶⁾。

おわりに

東日本大震災の4ヶ月後の2011年7月に新海誠は宮城県名取市閑上を訪れている。閑上町区では709人(住民の12.5%)が津波の犠牲となった⁽⁵⁷⁾。『君の名は。』の出发点は、この閑上訪問であったという。閑上で、自分がここにいたこともありえたと想像したとき、「もしも自分が閑上のあなただったら」という「入れ替わりの映画を作ろう」と思ったのだという⁽⁵⁸⁾。

津波は、地震や台風などとは異なり「災害間隔の長い災害」であり、「そ

う頻繁に押し寄せてくることはない」。しかし、そのために「自然にまかせておけばどんどん風化していく災害でもある」。体験や記憶が風化し薄れてしまったために、「天地号泣するような大災害になるという哀しい歴史を繰り返して来たのが津波なのである」⁽⁵⁹⁾。千二百年周期で繰り返される隕石災害という設定は、体験の記憶も記録も残されていないなかで住民避難のシステムをいかにして継承するかという問題をあつかうためのものと考えることができる。

むろん、たんに過去の災害を記憶していればよいという話ではない。三陸沿岸では1856（安政3）年の津波で42人が亡くなっているが、このときの津波は比較的緩慢で、建物の二階に避難して無事だった者もいた。しかし、1896（明治29）年の明治三陸大津波の際には22,000人も命が失われている。津波の規模の大きさが被害を大きくしたことは確かであるが、四十年前の津波の体験から「津波を割と甘く考えていた」ために油断して溺死した例も多く、逆に「体験のない人ほど慌てて逃げ出したので助かった」という例もあったようである。過去の一度の津波体験を絶対視したことも、被害を大きくした一つの要因と考えることができる⁽⁶⁰⁾。

戦前は、軍需物資であるコンクリートを使用する防潮堤の建造などが不可能だったこともあり、災害教育が重視された。しかし、戦後、政府や防災行政担当者は、公共投資をともなう防波堤、防潮堤などの建造は熱心に進めたが、住民教育はおろそかにされてきた⁽⁶¹⁾。避難勧告や避難指示の制度が導入されても、防災意識が醸成されていなければ現実の避難にはつながらない。住民の防災教育こそが被害の回避を継承するシステムとなる。

富士山は三百年以上噴火していないため、富士山の噴火を体験した人はいまはだれもいない。しかし、火山学者は、将来は確実に噴火するという。2004年にはハザードマップも作られ、2021年には改訂版も公表された。防災対策も検討されているという。だが、富士山の噴火のような災害には、地震や津波に対する対策が通用しない可能性も指摘されている。1707年の宝永噴火の記録などから、同様の噴火が起こった場合の降灰の影響が推定されてい

る。交通や水道、物流に多大な影響をおよぼすと考えられるという。⁽⁶²⁾三百年前にはありえなかったことである。そして、広範囲の降灰に対し全員が避難するという対応は不可能である。過去のさまざまな記録やデータをもとに、問題への対応方法を考えていくしかない。

未来の災害は、可能性としてあるだけであり、現在は存在しない。それは生成することによってはじめて存在する出来事となる。未来の災害がもたらす被害についての言明は、現在は真でも偽でもなく、それを正しく知ることはできない。しかし、回避しようという意志は現在のものである。そして、それをもたらすのは過去の痕跡や記憶を未来に延長することで獲得される「ある程度筋の通った信念」である。記憶や記録が消滅すれば、過去は変わる。そして過去が変われば、過去を未来に延長した予測も変わる。その結果、現在の意志も変わることになる。それゆえ、重要なのは記憶や記録の消失に抗うことである。

しかし、震災の教訓を伝えようとすることは、地元の人々からは迷惑だとされることもある。観光地や温泉地などでは災害の記憶を呼び覚ますような行為は忌避されることもある。⁽⁶³⁾東浩紀は、「日本人の忘れっぽさ」について語っている。⁽⁶⁴⁾教訓を伝えることは「ありがた迷惑」とされ、報告や記録などの情報は「存在しない」ことにされ、残されていた公文書は「改竄」される。

現在の意志は、記憶の消失に抗することによってしか保ち続けることができない。「忘れちゃだめな人」(小説206)とは、忘却に抗うべき過去である。『君の名は。』は、その意味で忘却への抵抗の物語である。

[注]

- (1) 大森荘蔵『新視覚新論』(講談社学術文庫・2021年) 3頁。
- (2) 同書, 83頁。
- (3) 大森荘蔵『物と心』(ちくま学芸文庫・2015年) 189頁。
- (4) 同書, 219頁。

- (5) 同書, 209頁.
- (6) 野矢茂樹『大森荘蔵—哲学の見本』(講談社・2007年) 113頁以下.
- (7) 大森荘蔵『流れとよどみ』(産業図書・1981年) 124頁以下.
- (8) 同書, 129頁.
- (9) 大森・前掲注(3)『物と心』219-220頁.
- (10) 大森・前掲注(1)『新視覚新論』295-296頁.
- (11) 大森・前掲注(3)『物と心』219-220頁.
- (12) 大森荘蔵『時間と自我』(青土社・1992年) 47頁.
- (13) 同書, 104-105頁.
- (14) 同書, 44頁以下.
- (15) 同書, 48頁以下.
- (16) 同書, 51頁.
- (17) 同書, 111頁.
- (18) 同書, 117-118頁.
- (19) 同書, 119頁.
- (20) 同書, 105頁.
- (21) 「みなさまの質問にお答えいただきました [完全版]」Blu-ray『君の名は。』スペシャル・エディション封入ブックレット(東宝・2017年) 92頁.
- (22) 新海誠『小説 君の名は。』(角川文庫・2016年) 13頁. 以下, 同書の該当箇所は(小説+頁数)のかたちで本文中に示す.
- (23) 大森・前掲注(12)『時間と自我』106頁.
- (24) 列車内で食べる「みそカツ丼」の消費期限の日付.
- (25) 大森・前掲注(1)『新視覚新論』174頁以下.
- (26) 野家啓一『物語の哲学』(岩波現代文庫・2005年) 280-281頁.
- (27) 大森・前掲注(1)『新視覚新論』175-176頁.
- (28) 大森・前掲注(12)『時間と自我』22-23頁.
- (29) 大森・前掲注(1)『新視覚新論』176頁.
- (30) 大森・前掲注(12)『時間と自我』14-15頁.
- (31) 同書, 16-18頁.
- (32) 同書, 18-20頁.
- (33) 同書, 21-23頁.
- (34) 野家・前掲注(26)『物語の哲学』287頁.
- (35) 同書, 288-289頁.
- (36) Danto, A. C., *Narration and Knowledge*, Columbia U. P., 1985, p. 152. アーサー・C・ダント(河本英夫訳)『物語としての歴史』(国文社・1989年) 185

- 頁.
- (37) 野家啓一『歴史を哲学する』（岩波書店・2007年）81頁.
- (38) Danto・前掲注（36）*Narration and Knowledge*, p. 151. 邦訳184頁.
- (39) 野家・前掲注（37）『歴史を哲学する』12頁.
- (40) 大森・前掲注（12）『時間と自我』111頁.
- (41) 前掲注（21）「みなさまの質問にお答えいただきました [完全版]」82頁.
- (42) 野家・前掲注（37）『歴史を哲学する』44-45頁.
- (43) 同書, 37頁.
- (44) 同書, 47-48頁.
- (45) Dummett, M., *Truth and Other Enigmas*, Harvard U. P., 1978, p. 342. マイケル・ダメット（藤田晋吾訳）『真理という謎』（勁草書房・1986年）354-355頁.
- (46) 大森莊蔵「『後の祭り』を祈る」「時は流れず」（青土社・1996年）69-75頁.
- (47) 同書, 74頁.
- (48) 野家・前掲注（37）『歴史を哲学する』159頁以下.
- (49) 新海は『君の名は。』を「切実な祈りの物語として描いたつもり」だという。しかし、それが「タイムスリップで過去の災害をなかったことにする許しがたい物語、と評されること」もあったという。劇場パンフレット『天気の子』（東宝映像事業部・2019年）13頁.
- (50) 中島義道『「時間」を哲学する』（講談社現代新書・1996年）174-177頁.
- (51) アリストテレス『命題論』第9章.
- (52) 野矢茂樹「宿命論について」『他者の声 実在の声』（産業図書・2005年）318-319頁.
- (53) Danto・前掲注（36）*Narration and Knowledge*, p. 197. 邦訳239頁.
- (54) 渡名喜庸哲「カタストロフィを語る哲学と映画」吉川孝, 横地徳広, 池田隆（編）『映画で考える生命環境倫理学』（勁草書房・2019年）144頁以下.
- (55) 加納新太『君の名は。Another Side : Earthbound』（角川スニーカー文庫・2016年）267頁.
- (56) 未来に関する言明は真でも偽でもないと主張することで、未来の出来事の生起はすべて決定されているという「論理的決定論」は回避され、未来における「宿命」は拒否される。しかし、三ツ野陽介は、過去を振り返り、過去の出来事を物語るなかで、出来事の中の宿命的な結びつきを語ることは可能であるとする。三ツ野陽介「自由と物語—自由と決定論の物語的な両立について」東京大学教養学部哲学・科学史部会『哲学・科学史論叢』第16号（2014年）237

頁以下.

- (57) 「東日本大震災名取市の記録」(名取市 HP) 31頁.
- (58) 榎本正樹『新海誠の世界』(KADOKAWA・2021年) 358-359頁. 新海は28歳の時の東日本大震災が「四十代を通じての通奏低音となった」と述べている. 2022年に公開予定の『すずめの戸締まり』の物語もまた、「その音」を聞きながら書かれたものであるという. 新海誠『小説 すずめの戸締まり』(角川文庫・2022年) あとがき, 369頁.
- (59) 山下文男『津波てんでんこ—近代日本津波史』(新日本出版社・2008年) 214-215頁.
- (60) 同書, 34頁.
- (61) 同書, 217頁.
- (62) 萬年一剛『富士山はいつ噴火するのか?』(ちくまプリマー新書・2022年)
- (63) 山下・前掲注(59)『津波てんでんこ』64頁.
- (64) 東浩紀『忘却にあらがう—平成から令和へ』(朝日新聞出版・2022年)

[付記]

本研究は JSPS 科研費 JP21K00015 の助成を受けたものである.